様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（Ａ）

研究期間：2006〜2008

課題番号：１８２０２００１

研究課題名（和文）科学的合理性と社会的合理性に関する社会哲学的研究

研究課題名（英文）　A Social Philosophical Study of Scientific and Social Rationality

研究代表者

野家　啓一(NOE KEIICHI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40103220

研究成果の概要：科学技術と社会とが接する場では様々な対立が起こる。本研究ではこれを，合理性をめぐる問題として捉え，哲学と科学技術社会論を統合した研究を行った。即ち，一方で，原子力を具体事例として，対話を通して社会と市民に開かれた新たな合理性を追求するコミュニケーション論的研究を行った。他方，こうした議論に理論的な裏付けを与えるものとして，旧来の科学的合理性や社会的合理性の概念的枠組みの再検討を行い，内外の研究者を交えて哲学史的,応用倫理学的な議論を重ね,新たな合理性モデルにつながる試論の提出を試みた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	9,800,000	2,940,000	12,740,000
2007 年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
2008 年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
年度			
年度			
総　計	22,700,000	6,810,000	29,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・「哲学･倫理学」
キーワード：合理性，討議倫理，物語り論，科学技術コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

(1)自然科学か社会科学かを問わず，科学的知見はしばしば不確定要素を抱え込まざるを得ない。科学的合理性が係争中の問題に対して唯一の説明根拠を与え得ない事例も少なくないし，科学者の間で意見が対立するようなケースや，長期予測が困難で科学が一義的な結論を出せない問題も数多い。にもかかわらず，一定の期間内に明確な社会的決定を行うことが，政策決定の場や裁判において求められている。ここに，意思形成における科学的合理性の貢献度の限定性と社会的な合理性の意義が課題となる理由がある。

(2)他方，科学研究の進展には様々なレベルでのポリティックスが関わっており，科学的合理性とともに，社会的合理性が深く関与している。それゆえ，これまで哲学的扱いが手薄だった技術的知識を念頭に，公共的営みとしての科学技術の意味が問われねばならない。従来，科学的合理性の基準として，普遍性・実証性・数量化・非人称性等の指標が挙げられてきたが，科学技術と社会との接点に

おいては，視点や人称性を排除することはできず，出来事を解釈し，意味づける一種の「物語り的説明」の文脈の中で，科学技術の合理性の社会的意義が問われる必要がある。
(3)社会的合理性に関しても議論装置は概して未整備である。専門家と非専門家たる市民との間の意思形成については，医療倫理におけるインフォームドコンセント・モデルや，利害関係者の参加を唱えるステイクホールダー・アプローチが提唱されているが，いかなる決定が妥当で合理的と見なされるかについては，いまだ論議が継続中である。視点や利害の対立する人称的状況において，人々があることを妥当なものとして取り決め受け入れるあり方と根拠を提示し，物質的豊かさとともに精神的豊かさを持った社会への道筋をつけることが，様々な差異を抱え込んだ21世紀社会の喫緊の課題となっている。

２．研究の目的
(1)上の「研究の背景」で述べた事態を科学的合理性と社会的合理性の齟齬に起因する問題として捉え，「社会哲学」的視座から基礎的枠組みの構築と実践的方法論の定礎を試みる。社会哲学的とは，専門家と非専門家との間の情報格差，富の分配の不均等，社会における支配的地位と従属的地位，価値観をめぐる対立等，現実に直面する格差・対立を考慮して，倫理的な原則や理論とともに，社会的な制度，構造，政策をも考察の射程に入れるという意味であり，同時に，討議倫理やアイデンティティの倫理等の成果をもとに「物語り論的」対話状況そのものの成立条件を解明する哲学的な検討をも意味する。かくして，科学的合理性と社会的合理性を成立基盤に遡って歴史的に解明するとともに，新たな「合理性モデル」を構築することによって，実践的問題への適用を試みる。
(2)具体的には，古代，近代，現代の各哲学分野の専門家を中心に，技術倫理，企業倫理，環境倫理等における意思形成，同意，説明責任等に関し，その共通点と相違点とを明らかにし，それと合理性概念に関する哲学史的考察とを有機的に結合して哲学的・倫理学的考察に裏打ちされた社会哲学の構築を目指す。
(3)また，社会的な意志形成と深い関わりを持つNPOの政治学，環境社会学，科学技術社会論等の専門家の参加を得て，市民と科学者・工学者との間の科学技術コミュニケーションの現状把握と学際的視点からの評価と理論化を行い，倫理学的・哲学的議論と社会科学的議論との統合を図る。目標としては，実践的なコミュニケーション・プログラムの作成，試行および事後評価を行う。

３．研究の方法
(1)研究課題に照準を合わせて，以下の三つの研究グループに分かれて問題点の整理と分析を行った。「哲学史グループ」（合理性概念の歴史的考察，２１世紀社会に適合する新たな「合理性モデル」の提示），「社会倫理グループ」（応用倫理分野に即した意思形成や合意の「物語り論的モデル」の可能性の検討，コミュニケーション実践への活用のための方法論の整備），「科学技術社会論グループ」（価値対立，主体形成（NPO），制度論の三方向から社会的意思形成と合意を総合的・多角的に位置づけ，コミュニケーション実践の方法論を練り上げ，具体的な場で試行する）。
(2)各グループを中心に，内外の研究協力者を招聘ないし訪問して，意見提供を求めるとともに，年に数回，シンポジウムないしワークショップを開催した。その成果の一部は，『モラリア』等の印刷物で公開した。
(3)海外の学会，海外機関・他科研費プロジェクトとの共同企画に研究代表者，分担者を派遣し，とくにアジア，ヨーロッパの研究者との合理性に関する研究交流を行った。
(4)原子力をテーマに賛成・反対の両方の専門家と市民を交えたフィーラムを２回開催し（東北大学未来科学技術共同研究センター，大阪大学コミュニケーションデザインセンターと共催），科学技術コミュニケーションの実験およびその事後評価を行った。

４．研究成果
(1)総論：本研究の総論として次の点が確認された。即ち，グローバリズムの進展と平行的に，自然科学，社会科学，人文科学を問わず一切の現象が「自然的」であり，自然科学的方法による合理的説明を許容するという立場が登場してきた。これにより旧来の固定的境界が取り払った意義は認められるが，同時に「人類の持続可能性」という観念のもとに，科学的合理性と社会的合理性とを統合し，「人間の操作的自然化」ではなく「人類の共生的自然化」へと向かう知の構築が急がれる。その核心は，歴史と社会の中で自分の現在位置を確認するための地図を描くことができ，それに基づいて人類社会のために何をなすべきかを知ろうと努力している状態としての「教養」にある。現代の教養は，科学技術の社会的影響や地球環境の危機について何をなすべきかを知るべく，人文知と科学知の双方を射程に収めねばならず，そしてこの教養の上に，科学技術の合理性の社会的意義は，出来事を解釈し，意味づける物語り的，対話的な文脈で再構築されなければならない。
(2)科学技術コミュニケーション：具体的な研究として，原子力に関する対話実験を行った。原子力をめぐっては，配管のひび割れ問題の例に顕著なように，科学的理論・経験に基づく判断では直接的危険が生じないとする専門家内部での合意と，運転再開をめぐる

社会的意志決定の食い違いという問題や，今日的には，原子力発電を CDM（クリーン開発メカニズム）技術として承認することの是否をめぐる政策的問題において，その合理的決定のあり方が絶えず問われてきた。本研究では，方策を種々工夫することで，対立する立場の間で相互に敬意を払った理性的な実質的で議論を行い，細かな合意を積み重ねうることを確認した。これはこれまで原子力に関する討論会では見られなかったものである。この実験を通じて次の課題が明らかになった。第１は議論の公正さの確保である。推進側が知を独占する巨大技術開発においては反対側に事実データの提出を求めることは公正さを欠くが，逆に，推進側の専門家には直接の研究領域を超えた問題にも答える努力が求められる，という非対称性が存する。第２は市民が直接の利害関係を超えていかにして「市民的良識」に立ちうるかという問題である。対話を社会に実装する際にはこの問題はより先鋭化する。第３に，はじめに結論ありきの事実提示ではなく，市民参加の形をとった場合，専門家が「欠如モデル」を超えていかなる科学知を提示しうるかという，問題がある。以上から，この実験を踏まえ，市民参加の階梯を高めていくためには，熟慮型対話を創出するための経験知の蓄積と理論的基礎付けの必要性が結論づけられる。

(3) 上記に関連して次の議論が提示された。

①このような対話をガバナンスの視点から捉える政治学の立場からは,理性をはたらかせ,公共的理由(ロールズ)をあげながら合意形成を行う熟議デモクラシーないし討議デモクラシーの意義が指摘される。この場合,公共的な理由を掲げることができる能動的な市民(パブリック)が存在するかどうかが問題となる。日本の現状ではパブリックコメントのレベルにとどまり,パブリックインボルブメントをどう実現するのかの方向性すら定まっておらず,ガバナンスへの関与をめぐってこうした市民が欧米と同様な機能を果たすのは困難である。

②哲学史サイドからも,現代の民主主義社会の統治で統治の目的を一意的に規定することの困難さが挙げられた。プラトン政治哲学においては,政治的支配の目的が例えば市民の幸福な生の実現として規定され,しかも幸福な生の内実がある程度具体的に規定されているため,政治的支配の合理性が何に存するのかは明確である。これに対し現代の民主主義社会の統治では,支配者による人民の支配という枠組はそのままでは適用しがたいため,社会的文脈での行為の合理性が具体的に何かを特定するには,当の行為等に参与する者それぞれのコミットメントを明確化し,衝突があるときにはこれの調停がはかられることが不可欠となる。それゆえ,社会的合理性の検討においては,各人のコミットメントを明確化し,その調停をはかる場面での合理性が重要となる。こうして討議倫理の原理的検討が社会的合理性の解明の鍵となるとの議論が提示された。

③これに対し,以上の公共空間が土地の時間も土地の空間も超えた共通言語のもつ共通空間であるのに対し,長い時間をかけて人々とその〈生の自然〉との間で生み出されてきた公共領域があるとの議論もなされた。前者は効率的・平均的で最普遍的な公共的情報からなるが,その高度な普遍性のゆえに,ときに目的地のすぐ近くまで導きながら,それ以上を不可能にする知へと知性を差し向けてしまう。この知はときに杓子定規となり,その分,状況に沿った柔軟で誰にでも備わる普通の知は鳴りを潜めてしまう。公害病認定訴訟における政府・企業と地元民との問をはじめ様々の「現場」で先鋭化するのが,こうした知の杓子定規さだとすれば,このような宙に浮いてしまった知を着地させるための努力も忘れられてはならないのではないかとの主張が提示された。

こうした公共への市民の関与と名もない土着の知の扱いは今後の課題となる。

(4) 合理性概念の哲学史：近代哲学の多くが神の思想を成立根拠としていることから,ドイツ観念論に依拠して,次のような成果が示された。まず,最終根拠としての神の理解が「理性性」の基準と見されうることである。神と人間との近さと同時に限りない隔たりの意識とが,人間理性の本質をなす,と考えられる。その際,神の理性が理論理性として,科学的合理性の基準とみなされ,他方,この世界へと下降し,人間化した神の理性が,人間的諸事象の原理と見なされるとき,それが実践理性,社会的合理性として顕わになる。それゆえ,科学的合理性と社会的合理性という両概念は決して別のものではないが,有限な存在としての人間においては必ずしも一致するわけではないということになる。

(5)合理性と倫理との関係:

①科学技術倫理に関して，科学的合理性と企業や経営の論理の対立と見える不正や失敗の事例について，両者が交錯する複雑な「プロセス」の重要性が指摘された。科学技術を使用する現場では，科学的合理性が働いているとはいっても，逸脱をそれとして判断するには，何かに「気付き aware」，それを問題として定立し，場合によっては従来の解釈や意味づけの図式=物語り(例えば，安全性についての「神話」)を変更していく一連の過程が必要である。「不正」の一部分は，この過程における齟齬に由来する。かくして科学的合理性をより柔軟に把握することの重要性と，技術者個人の倫理に収まりきらない組織の倫理の必要性とが示された。

②アリストテレスの徳倫理学の視点からは，科学的合理性と社会的合理性との位相の検討に際し，「知性的徳」と「性格的徳」との差異的統合が有益な論点となることが示された。即ち，各々の徳は最終的には「観想」と「実践」とへの分岐という契機を孕みつつ，知性的徳としての「思慮」が行為の統合的な核となる。それゆえ，「手段」としての科学的合理性を「目的」としての社会的合理性が主導する点に，合理性の本源的なあり方が見出される。こうした思慮という合理性は，理性と感情との統一，論理的な厳密性と柔軟性との調和，普遍妥当性と個別適応性との統合，徳の教授可能性，倫理的問題の発見とその解決能力等に向けられた，倫理的思考の俯瞰性を証示している。それは実践的場面で合理性が発現するあり方を示す原点となる。

(6)本研究の位置づけ等：本研究でなされた対話実験は，日本では原子力をめぐるものとして初めてのものであり，科学技術コミュニケーションの実例としてその意義は大きい。この実験は，欧米での諸実験と並んでこれからモデルの一つとなろう。これに対する対話的合理性のモデルであるが，政治学，社会学分野での議論展開と実例を踏まえ，哲学史上の合理性概念の変転を顧みた上で，我が国の社会に適合する形で新たに構想される必要がある。(2)ー(5)で示したような本研究で見出された糸口をこの方向でいかに展開していくかがこれからの課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　27　件）

1. Kazuhisa Shinozawa," Some Remarks on the Value of Information from the Viewpoint of Aristotelian Semantic Triangle," *Interdisciplinary Information Sciences*, Vol.15-1, 2009, 査読あり, pp.25-35.

2. 山本啓「「新しい公共」のデコンストラクション：シティズンシップとガバナンス」，『法学新報』第 115 巻第 9・10 号，2009，査読あり，pp. 845-889.

3. 野家啓一「構成主義とは何だろうか：科学哲学の視点から」，『日本物理学会誌』第 63 巻第 5 号，2008，査読あり，pp. 381～384.

4 . 野家啓一「哲学のアイデンティティ・クライシス」，『アルケー（関西哲学会年報）』第 16 号，2008，査読なし，pp. 1-11.

5. 座小田豊「「自由」の運命としての否定性―「おのれを実現する懐疑主義」（『ヘーゲル哲学研究』日本ヘーゲル学会，第１４号，2008）査読あり，pp. 66-70.

6. 篠澤和久「脳・時間・責任 －リベット『マインド・タイム』断想 －」，『創文』No. 513, 2008，査読なし，pp. ６－９.

7. 荻原理「われわれがしていることにめまいをおぼえてはならない」，『思想』（岩波書店）1011，2008. 7，査読なし，pp. 80-96.

8. Satoshi Ogihara, "The Epicurean Attitude to Death, " in: *International Colloquium of Ancient Philosophy and Greco-Roman Studies -2008 Summer*, Korean Society of Greco-Roman Studies, 2008, 査読あり, pp. 47-58.

9. 戸島貴代志「出自」，『モラリア』第 15 号，2008，査読なし，pp. 103-122

10. 直江清隆「脳と心の哲学的問題圏へ --現実からの出発」,『モラリア』第 15 号, 2008, 査読なし，pp. 1-9.

11. Hiraku Yamamoto, "Governance including Government: Multiple Actors in Global Governance," *Interdisciplinary Information Sciences*, GSIS, Tohoku University, Vol.14-2, 2008, 査読あり, pp.58-72.

12. 長谷川公一　「自然再生プロジェクトと地域づくり―環境社会学の視点から」『環境と公害』38 巻 2 号, 2008, 査読あり, pp. 23-29,

13. 八木絵香，北村正晴「原子力問題に関する新しい対話方式の可能性」，『科学技術コミュニケーション』3 巻, 2008, 査読あり, pp. 16-29.

14. 野家啓一「存在するとは物語られることである」，『文学』第 8 巻第 1 号，2007，査読なし，pp. 60-66.

15. 座小田豊「「真実の生」における人間―フィヒテ宗教論の射程」，『フィヒテ研究』日本フィヒテ協会, 第 15 号，2007, pp. 22-41.

16. 荻原理「学位論文におけるマルクスの方法の一側面」，『文化』（東北大学文学会）第 71 巻第 1/2 号，2007，査読あり，pp. 1-24.

17. 戸島貴代志「長い時，短い時」『創文』№. 504，創文社，2007. 12，査読なし，pp. １－５.

18. Hiraku Yamamoto, "Multi-level Governance and Public Private Partnership," *Interdisciplinary Information Sciences, GSIS, Tohoku University,* Vol.13-1, 2007, 査読あり, pp.65-88.

19. 長谷川公一「『原子力ルネサンス』とヨーロッパ」,『科学』77 巻 11 号, pp. 38-41, 2007.

20. 長谷川公一　「社会学批判者としての宇井純――社会学的公害研究の原点」，『環境社会学研究』13 号，2007，査読あり，pp. 214~223.

21. 清水哲郎「尊厳をもって死に到るまで生きる」『緩和ケア』17-1，2007，査読なし，pp. 3-4.

22. 清水哲郎「中世普遍論争―何が争われたか」,『大航海』62, 2007, 査読なし, pp. 82-93.

23. Tetsuro Shimizu, "Non-consequentialist Theory of Proportionality: with reference to the Ethical Controversy over Sedation in Terminal Stage," *Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine*, Vol.2, 2007, 査読あ

り, pp.4-25.
24. 荻原理「モンテーニュの見解」,『人間会議』(宣伝会議), 2006 年冬号, 2006, 査読なし, pp. 214-217.
25. 戸島貴代志「現象学的思惟―思惟することは思惟されているものによって捉えられている（後編)」,『思索』第 39 号, 2006, 査読あり, pp. 1-21.
26. 直江清隆「機能と意図の問題圏に寄せて」,『モラリア』第 13 号, 2006, 査読なし, pp. 1-12.
27. 直江清隆「技術倫理から見た臨床研究の問題」,『臨床倫理学』No. 4, プロジェクト研究《医療システムと倫理》, 2006, 査読なし, pp. 79-83.

〔学会発表〕(計 20 件)
1. Keiichi NOE, “Nishida Kitaro as a Philosopher of Science”, Envisioning Japanese and Chinese Philosophical Potentials in 21st Century, The Hong Kong Institute of Education, Hong Kong, 2008. 12.13.
2. Hiraku Yamamoto, “Multi-level Governance and PPPs(Public Private Partnershipps)" BK21 3rd GSPP.A (Graduate School of Public Administration) International Conference, National University of Seoul. Korea, 2008.11.26
3. 篠澤和久「アリストテレスの徳倫理学と企業倫理」, 日独企業倫理セミナー(ハインリッヒ・ハイネ大学および基盤研究(B) 「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」と共同), ハインリッヒ・ハイネ大学, デュッセルドルフ, ドイツ, 2008. 11. 13.
4. 直江清隆「企業不祥事と組織倫理：事例分析から」, 日独企業倫理セミナー(ハインリッヒ・ハイネ大学および基盤研究(B) 「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」と共同), ハインリッヒ・ハイネ大学, デュッセルドルフ, ドイツ, 2008. 11. 13.
5. Koichi, Hasegawa, "Local Governance and Collaborative Process for “Climate Crisis” ", 6th East Asian Sociologists’ Conference, Seoul National University, 2008.10.11.
6. 座小田豊「神を認識するとはどのようなことか―ヘーゲルにおける「神」」第 17 回シェリング協会大会シンポジウム「ドイツ観念論における神の問題」の提題発表 弘前大学 2008. 10. 4.
7. Koichi, Hasegawa, "Environmental Sociology in Japan: Overview and the Next Targets" The International Symposium on East Asian Environmental Sociology, Hosei University, 2008.10.4.
8. Koichi, Hasegawa, “Local Movement and Local Governance for “Climate Crisis",” The First ISA Forum of Sociology, Barcelona, Spain, 2008.9.7.
9. Satoshi Ogihara, “The Epicurean Attitude to Death,” International Colloquium of Ancient Philosophy and Greco-Roman Studies, Donghwasa Temple, Daegu, Korea, 2008.8.6.
10. Keiichi NOE,“The Recent Movement of Philosophy in Japan,” East Asian Country Philosophical Associations Joint Conference 1, The XXII World Congress of Philosophy, Seoul National University, Korea, 2008.8.1.
11. 山本啓「ローカル・マニフェストとアドボカシー・コアリッション」日本評価学会, 東京工業大学, 2008. 6. 8.
12. 北村正晴, 八木絵香, 鳥羽妙, 狩川大輔, 高橋信「原子力に関するオープンフォーラム研究(1)-全体計画- Attempt of ″Open Forum for Nuclear Communication″ (1) Project Description」, 日本原子力学会 2008 年春の年会, 大阪大学吹田キャンパス, 2008. 3. 28.
13. 山本啓「NPO/NGOの公共政策への関与, 日本NPO学会, 中央大学, 2008. 3. 15.
14. 戸島貴代志「長い時, 短い時」実存思想協会・ドイツ観念論研究会合同シンポジウム, 早稲田大学, 2007. 9. 29.
15. Satoshi Ogihara, “The Contrast between Soul and Body in the Analysis of Pleasure in the Philebus’, ” VIII Symposium Platonicum, The International Plato Society, Trinity College, Dublin, Ireland, 2007.7.26.
16. 直江清隆「技術のナラティブへの序説」, 日本科学史学会東北支部, 仙台戦災復興記念館, 2007. 4. 22.
17. 野家啓一 基調講演「操作的自然主義 vs. 共生的自然主義」, 日中哲学フォーラム, 浙江樹人大学（中国), 2006. 11. 26.
18. 座小田豊「「真実の生」における人間―宗教論と知識学の間に」第２２回フィヒテ協会大会 シンポジウム『フィヒテと宗教』, 南山大学, 2006. 11. 18.
19. 戸島貴代志「長い時と短い時 － 死を受け止める情緒の多様 － 」日本宗教学会第 65 回学術大会, 東北大学 2006. 9. 17.
20. 荻原理 「プラトン『ピレボス』で一なる「快」が語られる場所」, 日本西洋古典学会第 57 回大会, 千里金蘭大学, 2006. 6. 4.

〔図書〕(計 22 件)
1. 篠澤和久 『人文社会情報科学入門』, 東北大学出版会, 2009, 全 297 頁（13-34 頁).
2. 野家啓一「科学のナラトロジー：＜物語り的因果性＞をめぐって」（岩波講座哲学第１巻『いま＜哲学する＞ことへ』所収）岩波書店, 2008, 全 299 頁（51-72 頁）.
3. 座小田豊「「無限」の形象化と心の襞―構想力の可能性について」（栗原隆編『形と空間のなかの私』所収）東北大学出版会, 2008, 全 323 頁（79-98 頁）.
4. Kiyotaka Naoe, “Design Culture and

acceptable Risk“ (in: P. Vermaas et.al.(ed.), *Philosophy and Design*), Springer, 2008, 359ps. (pp. 119-130).
5. 直江清隆「宇宙技術の価値」(岩波講座哲学第10巻『科学／技術の哲学』所収), 岩波書店, 2008, 全73頁(176-198頁)。
6. 山本啓「ローカル・ガバナンスと公民パートナーシップ：ガバメントとガバナンスの相補性」(山本啓編『ローカル・ガバメントとローカル・ガバナンス』所収), 法政大学出版局, 2008, 全210頁(1-33頁)
7. 山本啓「社会サービスの充実と公益行政」(間瀬啓充編『公益学を学ぶ人のために』所収)世界思想社, 2008,全319頁(194-211頁).
8. 清水哲郎『世界を語るということ―「言葉と物」の系譜学』, 単著, 岩波書店, 2008, 全 161頁.
9. 野家啓一編著『ヒトと人のあいだ』岩波書店, 2007, 全232頁（1-33頁）.
10. 野家啓一　『歴史を哲学する』, 単著, 岩波書店, 2007, 全170頁.
11. 座小田豊「芸術と無限」(栗原隆編『芸術の始まる時, 尽きる時』所収) 東北大学出版会, 2007, 全447頁（427-447頁）.
12. 座小田豊「フィヒテ-無限の自我と真実の生」(加藤尚武編『哲学の歴史』第7巻所収),中央公論新社,2007, 全 655 頁(300-346頁).
13. 戸島貴代志『創造と想起-可能的ベルクソニズム』, 単著, 理想社, 2007, 全288頁.
14. 戸島貴代志「アリエナツィオーン」, (秋富・関口・的場編『『存在と時間』の現在-刊行80周年記念論集-』所収), 南窓社, 2007, 全266頁（228~246頁）.
15. 直江清隆「カッシーラー」(須藤訓任編『哲学の歴史』第9 巻所収),中央公論新社, 2007, 全750頁（429-452頁）.
16. 堀雅晴, 山本啓「コミュニティ・ガバナンスの展望」(『公的ガバナンスの動態に関する研究』所収) 同志社大学人文科学研究所(人文研ブックレット),2007,全85頁(49-85頁).
17. 清水哲郎「ルター」(伊藤博明責任編集『哲学の歴史』第4巻所収),中央公論新社, 2007, 全750頁（393~428頁）.
18. 清水哲郎編著『高齢社会を生きる―老いる人/看取るシステム』東信堂, 2007, 全208頁（執筆：「高齢者にとっての生と死」(3-11頁),「人生の終末期における医療と介護―意思決定プロセスをめぐって」(15-46頁)）.
19. 戸島貴代志「ベルクソンと 18 世紀哲学―ルソーとカントをめぐって」(中田光雄編『ベルクソン読本』所収) 法政大学出版局, 2006　全317頁(151-160頁).
20. 淡路剛久, 川本隆史, 植田和弘, 長谷川公一編著『リーディングス環境 2　権利と価値』有斐閣, 2006, 全396頁.
21. 淡路剛久, 川本隆史, 植田和弘, 長谷川公一編著『リーディングス環境4　法・経済・政策』有斐閣, 2006, 全462頁.
22. 淡路剛久, 川本隆史, 植田和弘, 長谷川公一編著『リーディングス環境 5　持続可能な発展』有斐閣, 2006, 全354頁.

（他の研究資金と共同の成果も一部に含まれている）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ
http://www.sal.tohoku.ac.jp/philosophy/activities/base_research.html

６．研究組織
(1)研究代表者
野家　啓一(NOE KEIICHI)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40103220
(2)研究分担者
座小田　豊(ZAKOTA YUTAKA)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20125579
篠澤　和久(SHINOZAWA KAZUHISA)
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授
研究者番号：20211956
荻原　理(OGIHARA SATOSHI)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00344630
戸島　貴代志(TOSHIMA KIYOSHI)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90270256
直江　清隆(NAOE KIYOTAKA)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30312169
山本　啓(YAMAMOTO HIRAKU)
東北大学・大学院情報科学研究科・教授
研究者番号：60134079
長谷川　公一(HASEGAWA KOICHI)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00164814
北村　正晴(KITAMURA MASAHARU)
東北大学・未来科学技術共同研究センター・特任教授
研究者番号：00005422
(3)連携研究者
清水　哲郎(SHIMIZU TETSURO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：70117711